

20 周年に当たって思うこと

竹 内 郁 夫

(前岡崎国立共同研究機構長)
(元基礎生物学研究所長)

私は基礎生物学研究所設立12年目(1989)から18年目(1995)まで研究所長をしておりましたので、どこまで第三者としてのコメントができるかどうかはわかりませんが、思いつくままに意見を申し上げます。

まず、研究所がこれまで挙げてこられた研究成果が第一級のものであることは疑う余地のないところであると確信しています。限られた教官数と予算の下で最高の成果を上げてこられたと評価いたします。研究所のカバーする領域は極めて広く、現在も拡大しつつありますので、一極集中型の研究所とくらべるとその成果が目立ち難いということではありますが、研究所がわが国における基礎生物学研究において果たしている役割を考えると、この幅の広さが重要であると思います。

研究所はこれまで研究単位としての部門制を固く守ってきました。このことが研究所の高い研究実績を支えてきたと言えます。したがって、この体制を簡単に崩すことは賢明ではありません。しかし、このような体制をとってきたことの背景にはわが国における研究支援体制の貧弱さが大きく関係していたと思われます。時代は少しずつではありますが、変化していて、今後ポスト・ドクや一時雇用の教官数が増えていくことが予想されます。そうなれば、部門研究体制に多少の融通さを持たせ、若い優秀な助教授が小部門を担当するようなシステムを部分的に導入することも考えられるのではないかと思います。しかし、この場合には、助教授が外部からやってきて、また外部へ出ていくことを義務づける必要があると思われます。

教官の構成については、外国人がいないことと女性の少ないことが気になります。前者については、かつて外国人の助手がいたこともありますし、部門によっては外国人研究員の方が多いというところもありますので、国際交流という点では全く問題ないと思っています。また、女性についても、研究所に出入りしている女性研究者の数は確実に増えていると思われます。したがって、これらの問題は、外国人教官や女性教官をふやそうという特別の努力をしなくても、自然に解決するであろうし、それが最上の方策であると思います。しかし、現状は日本の中では問題ありませんが、国際的に見て異常であるという認識は持つておくべきだと思います。

最後に、一つ気になっていることを申し上げます。それは基礎生物学研究所に限らず、大学や他の研究機関においても言えることと思いますが、研究者があまりにも忙し過ぎることです。私が研究所に赴任した頃に比べて、教授をはじめ皆さん方は確実に忙しくなっているのではないのでしょうか。研究者が研究以外のことに多く時間をとられ、時間に追いまくられながら研究しているようでは、

よい研究の発展は望めないと思います。このような状況には研究所以外の要因も多々関係していますので、どうすればよいかは簡単には申せません。皆が努力してできるだけ無駄を省くという以外に方策がないのかも知れません。

研究所が持っている大きなポテンシャルを十分に活かして、今後研究所がますます発展することを祈っています。